

外国における文法地図

著者	グロータース W.A
雑誌名	方言文法全国地図
ページ	14-18
発行年	1989-03
シリーズ	国立国語研究所研究発表会 ; 昭和63年度
URL	http://doi.org/10.15084/00002886

外国における文法地図

W. A. グロータース

A. 言語地理学の出発

1. ドイツ: WENKER (1852-1911)

1876年から40文章による通信調査

内容……動詞活用: 57。他の文法: 24。合計 81項目。

目的……音韻変化の法則性を探ること。

※日本: 上田万年 (1867-1937)

BASIL HALL CHAMBERLAIN (1850-1935, 在日1886-1911) 師事による仙台
方言調査

ドイツ留学: 1890-1894

国語調査委員会 (1902) による『口語法分布図』1906

調査地点 880: 分布地図 37面

目的: 方言区画を設定すること

2. フランス: GILLIÉRON (1854-1926)

フランス言語地図 1902-1909: 地点639

2000項目: 動詞活用項目: 147

話者による活用表を記録する

生資料の地図のみ

文法論究として「不規則変化動詞の活用」

Etude sur la défectivité des verbes 1919, 135p.

フランス言語地図における文法の項目:

使用率高い動詞: 67地図:

avoir, être, aller, pouvoir, vouloir, ;その他 42地図

※日本: GILLIÉRONの影響による研究:

柳田国男 (1875-1962) 小林好日 (1886-1948)

おもに語彙研究

『日本言語地図』1966-1974 (再1981-1985)

(助詞地図 2枚)

B. 外国の言語地図：その特徴は総合調査における文法項目

1. スイス・イタリア言語民俗地図 1928-1940

Jud-Jaberg, Atlante linguistico-etnografico svizzero-italiano

調査票：354地点 2000項目

28地点（都会） 800項目

30地点（僻地） 4000項目

8巻，1705地図，第8巻の後半には動詞、文法と会話の資料：230文章
生資料の地図のみ

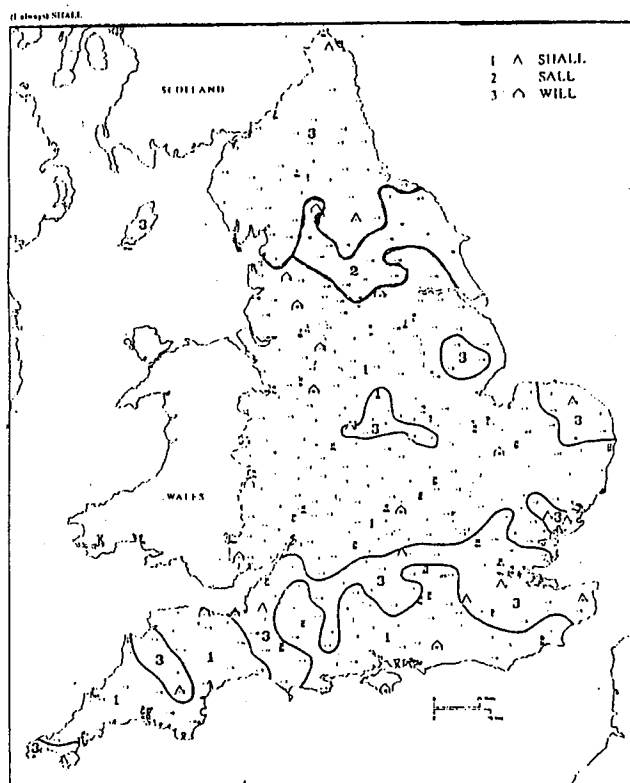
2. 英国言語地図（イングランド地方のみ）

The Linguistic Atlas of England, 1978

313地点，1300項目の内：205文法項目

調査：313農村：1950-1961

方法：等語線による分布図



I've always
done it that
way and I
think I always
S H A L L

3. 中世後期英語言語地図

A Linguistic Atlas of Late Mediaeval English 1986 4 vol.

1066年（ノルマン人の英国征服）以降、中央政府が使用した言語は Anglo-French（Anglo-Norman）であった。15世紀の中頃から、政府の公用語は英語になりつつあった。そして、その公用語が英語の方言が話されていた地方にまで拡がった。

中世後期英語言語地図は1325年－1425年の間に書かれた地方の方言の文献に基づいている。：250地点

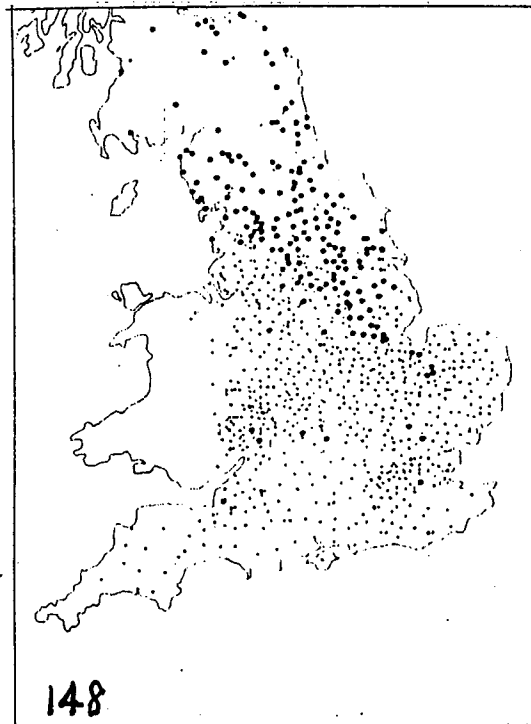
全国地図 612

北部 341

南部 245

その内
文法地図：155

SHALL → [SAL]



4. ガスコニエ言語地図

Atlas linguistique de la Gascogne ALG

語彙地図 3冊 1954-1958 169地点

文法地図 1冊 1966 155地点

456地図：方言形態

その他：90地点の全活用

地図の構成：塗りつぶした面

図例 ラテン語 **FACEERE** [fakere] 「作る」 フランス語 **FAIRE** [fɛʁɛ]

方言における語幹：1音節 ←→ 2音節

FA (図の黒い部分) FAK (図の白い部分)

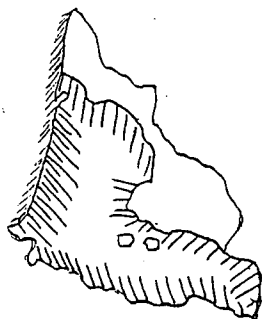
(進行形)

(en) FAISANT



(命令形・複数・第2人称)

FAITES



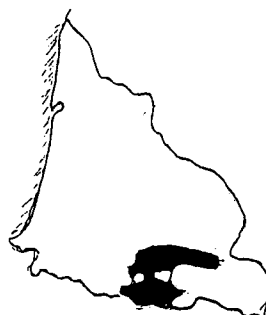
(過去形)

(je) FIS



(未完了)

(je) FAISAIS



5. ワロン地方言語地図 (ベルギーフランス語南部)

Atlas linguistique de la Wallonie

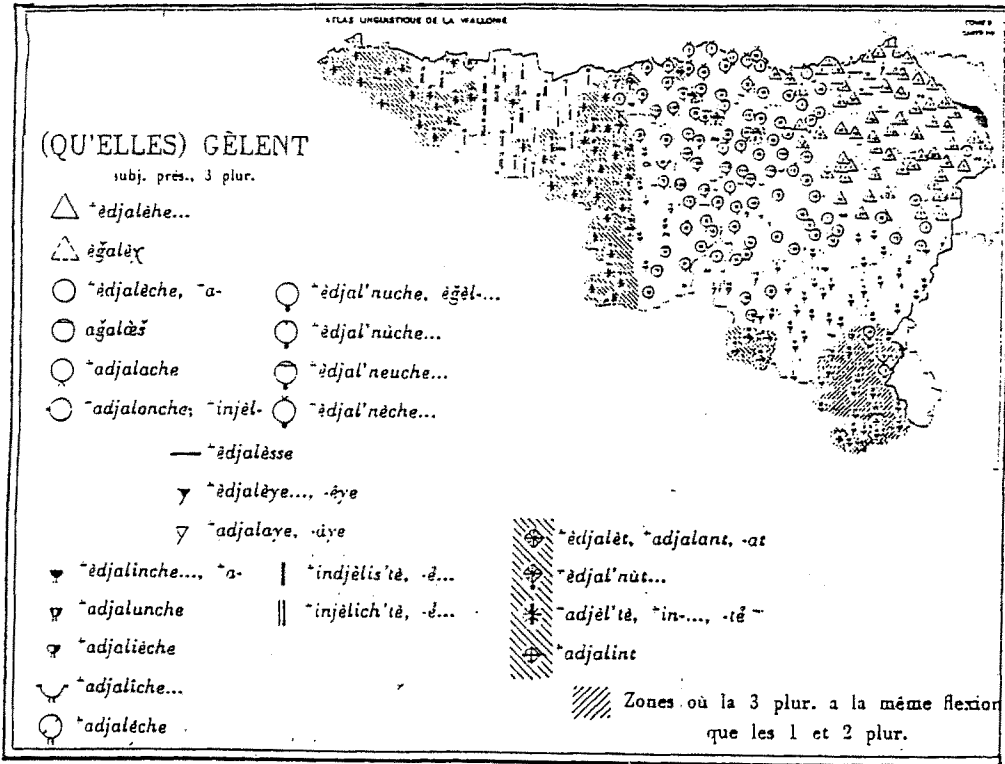
2100項目, 300地点 (南部の村の1/5)。文章の訳による調査。

1924-1946: 調査員 HAUSI [O:ST]。1947-1957: リエージュ大学7人

第1巻: 音声: 100図: 1953。第2巻: 形態・文法: 122図: 1969。

(その他: 語彙: 3: 70図, 1955。4: 83図, 1976。9: 51図, 1987)

特徴: 符号による分布地図。地点順の生資料と歴史。



結論: 三つの流れが現れていた

1. 生資料だけ (シリエロンの場合は特別な事情)
2. 分布地図だけ (多少のコメント付)
3. 分布図と生資料 (専門家のため、しかし贅沢)

お願い: 1988年12月20日のシンポジウムの席で東工大の田中穂積先生がこの研究所の名前を「国立日本語研究所」にすることを提案し、それを受けて柴田武先生も新しい名前を提唱した (朝日新聞、1989年2月2日、夕刊)。

その時に新聞がタイトルとして「不惑」の研究所と付けた。

「不惑」は論語2の3から。ここで論語13の3を引用したい。

「為政子将奚先? 子曰: 必也正名乎」

× National Language Research Institute

○ National Institute for Japanese Linguistic Research